



■ 2011年 アライアンス・フォーラム財団 スピルリナプロジェクト活動報告

Alliance Forum Foundation
米国内国歳入法典第501条C項3号の規定に基づく公益法人、
国連経済社会理事会 特別協議資格承認非政府機関
111 Pine Street Suite 1410 San Francisco, CA 94111
Email: info@allianceforum.org

一般財団法人 アライアンス・フォーラム財団
〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町4-4-20 三井第二別館7階
TEL: 03-6225-2795 FAX: 03-6225-2791
Email: info@allianceforum.org

スピルリナ・プロジェクト

■ 2011年の活動概要

2月 当財団理事の現地訪問

当財団代表理事の原、理事の中内らが現地入りし、閣僚およびNGO、連携するNGO幹部に面会し、スピルリナプロジェクト開始に向け最終確認を行いました。また、WFPの現地トップや国家食料栄養委員会のヘッドとも面会し、プロジェクトの進め方について議論を行いました。

3月～6月 当財団職員の駐在によるスピルリナの配給活動

当財団スタッフの松上がザンビアに駐在し、パートナーNGOとのMOUの締結、スピルリナの輸入、そして配給活動を行う仕組みを作りました。また、効果測定調査を行うために調査倫理委員会に書類を提出し、後期の効果測定プロジェクトの準備を進めました。松上帰国後、現地スタッフとして中村がその後のフォローを行っています。

8月 効果測定調査のために乳幼児の身体測定を実施

効果測定プロジェクトの対象地域となるカナカントパ村で乳幼児を対象に身体測定を実施し、栄養不良の状態を確認しました。急性栄養不良の子ども達は少なく、どちらかというと慢性発育不全の子ども達が約半数を占めることが調査から明らかになりました。

11月 スピルリナプロジェクト活動報告会を実施

「アライアンス・フォーラム・レポート ～アフリカでのソーシャルイノベーションの取り組み～」と題してJICA地球ひろばにて一般の方を対象に、スピルリナプロジェクトの活動報告会を行いました。約50名にご参加いただき、プロジェクトの紹介、現状、そしてこれからの予定などを説明いたしました。また、現地と電話をつなぐなど、プロジェクトをより身近に感じられる内容にしました。

スピルリナ・プロジェクト

■ 理事によるザンビア訪問

当財団代表理事の原と理事の中内が2011年2月にザンビアを訪問し、スピルリナプロジェクトの実施に向けてNGOや政府関係者と面会し、協力を依頼しました。

2011年2月14日～17日、当財団代表理事の原と理事の中内がザンビアを訪問しました。NGOではKara CounselingのWinstone Zulu氏、Jack Menke医師に面会し、同NGOが運営するHIV/AIDS孤児の施設でのスピルリナ配給について協力を求めました。また、Programme Against Malnutrition (PAM)のDr. Masuhwa氏とMaureen Chitundu氏に面会し、農村地域でのスピルリナプロジェクトの展開方法について協議いたしました。

国際機関系では、World Food ProgrammeのカントリーマネージャーのRicalde氏に面会し、WFPのプログラムへのスピルリナ利用可能性について協議しました。また、現地に設立予定のアライアンス・フォーラム財団ザンビア支部の専務理事に就任予定のDr.Dev Babbar氏と面会し、スピルリナプロジェクトの実施についての協力を依頼しました。

政府系では国家の栄養政策の諮問機関であるNational Food and Nutrition CommitteeのDr. Massi氏と面会し、スピルリナのザンビアでの承認について協議しました。最後にザンビア共和国大統領のRupia Banda氏とも面会を行い、スピルリナプロジェクトを政府としてもサポートしたいというお言葉をいただきました。最後に江川大使と面会し、活動の報告を行いました。



スピルリナ・プロジェクト

■ パートナーNGOとのMOU締結

アライアンス・フォーラム財団は2011年4月にPAMと、6月にKara CounsellingとMOUを結びました。

PAMとはスピルリナの効果測定プロジェクトを、また、Karaとはスピルリナの供給プロジェクトを共同で実施することで合意しました。

Kara Counselling and Training Trust

KARA COUNSELLING

“POSITIVE AND FULLY ACTIVE” ✓

組織概要

- 1989年にマイケル=ケリーによって創設され、1991年に法人化
- カウンセリング、トレーニング、ケアなどで総合的にHIV/AIDS患者や孤児などの支援を実施



施設・活動地域

- Thorn Park Training Centre (ルサカ)
- Jon Hospice
- Umoyo Training Centre
- Cara Choma (チヨマ)
- Kara Clinic
- Monitor, Evaluation and Research Unit
- など

連携形態

- Jon HospiceにあるAmbuya Day Careの約30名のHIV/AIDS孤児にスピルリナを供給

Programme Against Malnutrition



組織概要

- ザンビアの人々の栄養状態の改善を目指す、ザンビア最大のNGO
- 1993年11月に設立
- 農村のNGO、政府、そしてドナーをつなげる役割を持つ



施設・活動地域

- 12万6千名を対象とする(2010年5月)
- 農村のリソースを活用し、農村の生活向上を行い、栄養状態の改善を行っている
- スタッフが村人にトレーニングを行い、リーダーの育成を行う

連携形態

- チョングウェ郡カナカントパ村にて、栄養不良児を対象にスピルリナを提供し、その効果を測定する

スピルリナ・プロジェクト

■ 農村でのスピルリナレシピのワークショップ

スピルリナをどのように現地の食事に混ぜれば良いかを検討するため、カナカントパ村のキャッサバ加工工場グループの協力を得て、4月14日スピルリナレシピの試作を行いました。パートナーNGO PAMのモーリンがワークショップを取り仕切りました。

スピルリナのレシピ試作にあたって注意した点は、①農村で普段食べている料理であること、②スピルリナの計量は計量カップではなく農村にある容器を使うこと、③子どもの評価だけでなく大人の評価も得ること、などでした。これらは全てスピルリナがプロジェクト終了後も継続して農村で利用されるために重要なポイントです。



Maureenから女性にプログラムの説明

レシピは1. 豆の煮物、2. キャッサバの葉の煮込み、3. カボチャの葉の煮込み、4. キャッサバドーナツ、5. フリッター(揚げパン)、6. ポリッジ(お粥)の6種類で、1、2、3、6について、スピルリナを調理中にA.2.5g/食、B.5g/食を加えたもの、また、調理後にC.5g/食を加えたものの3種類を作成しました。

また、これらのレシピについて味、香り、食感、外観の四項目について参加者15名がそれぞれ5段階評価を行いました。

このワークショップを通して以下が判明しました。

- ①最も評価が高かったのはカボチャの葉とポリッジのA.2.5g/食のレシピ。ほぼ全員が満点評価。
- ②キャッサバの葉は不評。
- ③全般的に5g/食より2.5g/食の方が高評価
- ④色についてはごく一部に不評だったが、概ね問題なしとの評価。
- ⑤調理中にスピルリナを加えるとスピルリナの独特の香りが抑えられることがわかった
- ⑥5才未満の子はポリッジ(お粥)を抵抗なく食べられる
- ⑦計量方法は彼らの容器に置き換えられる
- ⑧全体として女性の評価は高く、最後にスピルリナを各家庭で分け合う姿が見られた。



子ども達による試食



全員による評価

スピルリナ・プロジェクト

■ スピルリナのルサカへの到着

2011年4月、日本からスピルリナが到着しました。全く新規での輸入だったため、通関手続きに時間がかかるなど、スムーズではありませんでしたが、最終的には予定通りの場所に届けることができました。

4月29日、スピルリナプロジェクトに使用するためにDIC株式会社から提供いただいているスピルリナがザンビアに無事に到着いたしました。単なるスピルリナの輸入なのですが、ここに至るまでには様々な苦勞がありました。

スピルリナは野菜や果物と同様に単なる食物なのですが、海外でサプリメントとしている利用されているという情報からザンビア政府が薬として扱う動きを見せ、そのため輸入手続きが煩雑になる可能性がありました。Food and Drug Agencyという薬の監督部署と交渉した結果、スピルリナは薬ではなく食物であるという結論となり、2010年6月に農業省から輸入の許可を得ることができました。



スピルリナの保管場所



スピルリナの保管を担当するブルーノ

その後、輸入先の選定やDIC株式会社と調整など多くの手続きが重ね、通関で少しトラブルはありましたが、スピルリナがザンビアに無事に輸入されました。これによりプロジェクトを行う準備が整いました。あとはプロジェクトの実施を待つのみです。

スピルリナ・プロジェクト

スピルリナの配給

2011年5月、Kara CounselingのAmbuya Day Careでスピルリナの配給を開始しました。朝食と昼食にスピルリナを混ぜることで、一日2グラムの摂取を目標にしています。滑り出しは好調で子ども達は問題なくスピルリナ入りの料理を食べています。

2011年5月30日、Kara CounselingのAmbuya Day Careにてスピルリナの配給を開始いたしました。Ambuya Day CareはHIV/AIDSによって両親あるいは片親を亡くした子どもの施設で、初等教育を受けるために、英語による1年間の準備コースを提供しています。

多くの家庭は非常に貧しく、平均的な5-6歳児よりも子ども達の体格は小さいです。施設では栄養状態の改善に力を入れているので、朝食、昼食、そしておやつが提供されています。今回のプロジェクトではこの朝食と昼食にスピルリナを混ぜ、栄養を向上させることを目的としています。一人あたり一日2gのスピルリナの摂取を目標にしています。朝食ではポリッジというお粥が提供されており、そこに一食あたり0.7gのスピルリナを混ぜました。色は緑色ですが、味はほとんど変わらず、子ども達はいつも通りに平らげていました。



スピルリナの調理風景(ポリッジ)



食事風景

昼食では色が変わらない点を重視して、レイプという野菜の煮込みに混ぜることにしました。一食あたり1.3gを野菜の煮込みに混ぜました。少し量が多くて香りが気になる子もいましたが、皆最後まで食べていました。ポリッジに混ぜると味がほとんど変わらず、子ども達も抵抗なく食べられることが実証されましたので、今後はポリッジに混ぜる割合を増やし、野菜の方は少なめにして、一日の目標の2gを達成したいと考えています。

スピルリナ・プロジェクト

乳幼児の身体測定の実施

8月、現地駐在員の中村がカナカントパ村にてクリニックと共同で乳幼児の身体測定を行いました。これは発育状態を調べるという目的に加えて、効果測定プロジェクトの対象者のスクリーニングも兼ねています。

各村では、5歳以下の子どもたちを対象に月1回の身体測定が義務付けられています。クリニックから看護師さんが各村を巡回しますが、その他にChild Growth Promoterという子どもたちの発育を手助けするボランティアの方たちがいて、彼らと協力して身体測定を進めます。各村で一日に100人以上の子どもたちが来るので、彼らの協力がなければ、子どもたちの成長もないと言っていいくらい、彼らの存在は大きいと思います。

通常の身体測定では体重のみの計測ですが、今回は身長、体重、上腕囲を計測しています。カナカントパ村の中にある3カ所を訪問し、計350人近くの子どもの身体測定を行いました。



現在(2011年末時点)現地駐在員のスタッフ



体重の測定の様子

上腕囲はMUACテープ、身長は自作の身長計で計測するため、最初はボランティアの方々も慣れない様子でしたが、少しずつ器具にも慣れ、無事に計測を終える事が出来ました。

現在、スピルリナの提供による効果測定の様子はブログまたはFacebookにて掲載しております。

Blog : <http://allianceforum.jugem.jp/>

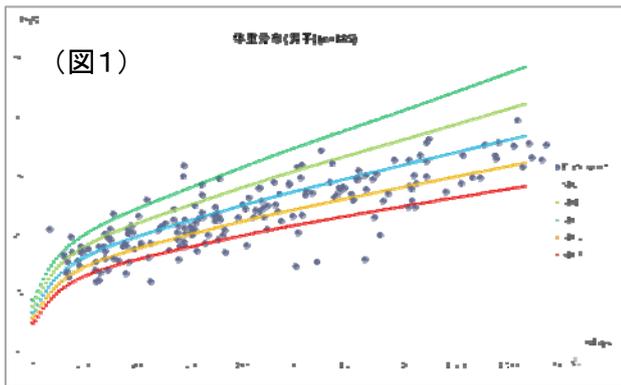
Facebook : <http://www.facebook.com/alliance.forum>

スピルリナ・プロジェクト

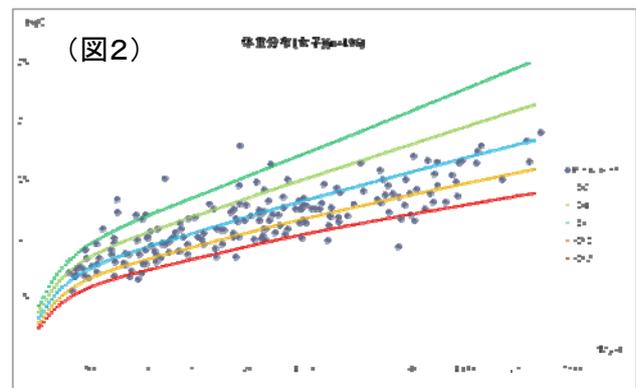
乳幼児の身体測定分析結果

身体測定の結果をもとに分析したところ、ザンビアの栄養不良の状態について非常に興味深い結果が得られました。急性栄養失調よりも、慢性栄養不全による発育不全に問題があることが判明しました。これに対してはタンパク質や各種ビタミンが豊富なスピルリナが有効だと考えられます。

栄養不良がどの程度かを分析したところ、体重は男子、女子ともに一部危険なレベルの子どもがいるものの、多くの子どもは体重に関してはほとんど問題ないことが判明しました。

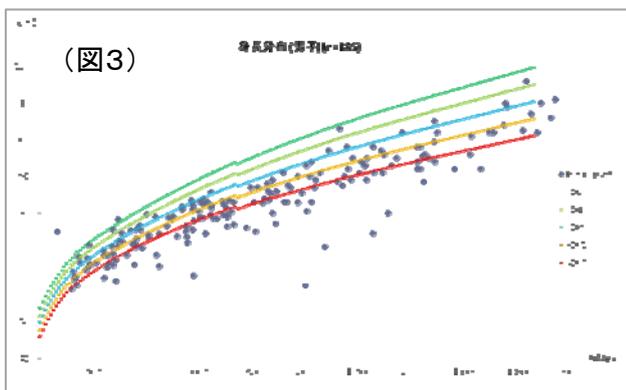


水色のラインが標準で、黄色以下だと警戒レベル、そして赤色以下だと危険レベル。男子では危険レベルは185人中、18人で、約1割程度でした(図1)。

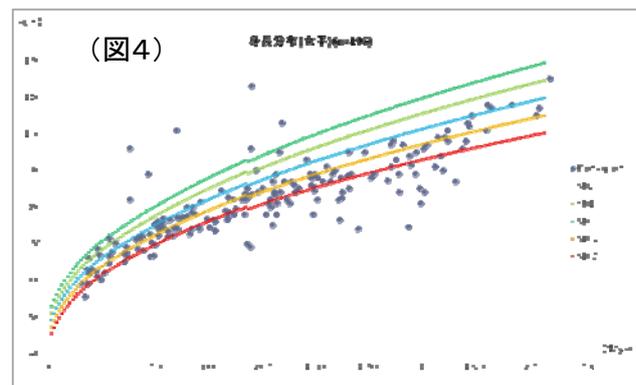


女子では196人中、11人で、男子よりも低い割合を示しました。この結果、ザンビアにおいて子ども達の体重は深刻ではないことがわかりました(図2)。

続いて身長発育を分析したところ、全年齢にわたって身長発育不全が観察されました。このことより、炭水化物のような日々の活動に必要なエネルギーは十分に足りている一方で、ビタミンやタンパク質が不足していることがわかりました。(図3・4)



水色のラインが標準で、黄色以下だと警戒レベル、そして赤色以下だと危険レベルです。ほとんどの子どもが水色のラインより下に分布しています。



また女子でも同様の傾向がみられました。この傾向は生後すぐに観察されていますので、母乳の与え方にも問題がある可能性があります。

スピルリナ・プロジェクト

活動報告会の実施

11月25日、JICA地球ひろばにて当財団のアフリカでの活動報告会を行いました。多くの方にご参加いただき、スピルリナプロジェクトのビジョン、また、進捗状況や今後の方向性について説明いたしました。

2011年11月25日(金)、JICA地球ひろばのセミナールームにて「第1回アライアンス・フォーラム・レポート～アフリカでのソーシャルイノベーションの取り組み～」と題して、スピルリナプロジェクトの報告会を行いました。50名以上の方々にご参加いただき、会場は満席となりました。

最初に当財団理事の中内からスピルリナプロジェクトを始めたきっかけやプロジェクト初期にアフリカ各国の大使館を訪問したことなどの説明をしました。次に当財団のプログラムマネージャーの松上からアフリカでのマイクロファイナンスの潮流を説明し、続いてスピルリナプロジェクトの進捗状況について説明をしました。



最後にザンビア現地と電話でつないで駐在スタッフから現地の報告、そして会場との質疑応答を行いました。

参加者からは「実際のスピルリナがにぼしのような臭いでびっくりしたが、クッキーで食べることができて嬉しかった」(30代女性)や、「スピルリナは日本でも子供用の食材として重要ではないか」(30代男性)といった感想が寄せられました。スピルリナ・プロジェクトの報告書は当プロジェクトをサポートしているDIC株式会社のCSRレポートに掲載されております。

(<http://www.dic-global.com/ja/csr/society/business.html>)
是非ともご覧ください。